



E-Defense

E-Defense Today

(Published by E-Defense, NIED, April 30, 2015, Vol.11 No.1)

仙台・防災産業展でEーディフェンスを紹介

国連防災世界会議にあわせて、3月15～17日に開催された防災産業展にて、Eーディフェンスを活用した実験研究を紹介する展示を行いました。この防災産業展では、企業や大学による防災・減災対策技術の展示や、公的機関・NPO法人等の災害時対応の紹介など、自然災害対策に関する出展が多数ありました。私自身、会場の各ブースを巡りながら、災害への備えや災害時・後の行動など、自ら取り得る対策を考える良い機会になりました。

私たち防災科研のブースでは、室内の耐震対策の有効性や長周期地震時の様子、免震構造の特徴などを、Eーディフェンス実験の映像やポスターを用いて説明し、多くの訪れた方々に興味をお持ちになったと思います。2日目には、Dr. ナダレンジャー・ナダレンコが広い会場を巡り、来場者が『ゆらゆら』や『エッキー』を体験するショータイムもありました。

海のそばにある会場の『夢メッセみやぎ』の最寄り駅からなだらかな道を歩きながら、先の震災に思い至りました。震災で亡くなられた方々に慎んでお悔やみを申し上げ、被災地域の方々に心よりお見舞いを申し上げますとともに、どのような地震が起きても私たちの命や生活に影響を生じない社会の実現を目指して研究に取り組み続けようと、改めて思いました。



【防災科研のブース】



【Dr. ナダレンジャー・ナダレンコの『ゆらゆら』ショータイム】

(文責：主任研究員 田端 憲太郎)

国連防災世界会議パブリックフォーラム 防災・復興に関する展示を終えて

私は3月13日の夜より仙台入りし、国連防災世界会議パブリックフォーラムのイベントの1つ、防災・復興に関する展示におけるブース展示の対応をしました。14日から18日までの5日間、各日朝10時から夜8時までという長時間に及ぶ展示会でした。

初日の14日はブース展示の他に、会場に設置されたコミュニケーションスペースで発表も行いました。時間になったらいきなりスペースを渡され、一切のアナウンスもなく突然始めることとなり、客の呼び込みから行うという出だしから苦勞の多い発表となりました。実験映像などを活用して呼び込みを行いましたが、実験映像に集録された加振実験中の迫力ある音に立ち止まって下さる方々も多く、視覚だけでなく聴覚に訴えるリアルな音の重要性についても再認識しました。

ブース展示では、2月に成果発表会を開催したばかりの吊り天井の実験結果をポスターで紹介するとともに、過去実施した様々な実験映像を流しました。ここでも実験映像は好評で、家具の転倒実験などを見

せながら防災対策の重要性について説明するとすんなりと理解してもらえるとともに、海外の方もぜひ自分の国で教育に使いたいとの話が出るなどしました。ただ単に口で訴えるだけでなく、映像データを活用し、対策の有無でどう変わるのかを実感してもらうことが、防災教育で非常に有効であると感じました。

今回の展示での経験を活かし、今後の実験研究においても、映像データの実験後の活用も見据えた計測計画を立て、広く国民に還元できる研究を進めていきたいと思えます。



(文責：研究員 佐々木 智大)

つくば・一般公開でEーディフェンスを紹介

4月19日の防災科研一般公開で、Eーディフェンスを活用した実験研究を紹介する展示を行いました。今年は、例年同様の実験研究紹介とEーディフェンス模型の展示に加え、中村いずみ主任研究員が『地震に備えるー地震被害と耐震のはなし』と題して、地震時の被害やその対策などについて講演し、聴講の方々にわかりやすく説明しました。

展示では、机の上に乗る大きさの小型振動台を使って、固有周期の異なる構造物や免震構造、地盤の液状化現象のデモンストレーションも行い、子ども達が揺れる様子を見ながらじっくりと私たちの話を聞いてくれました。特に印象深いのは、液状化地盤をイメージした砂の表面に、子ども達に指を軽く置いてもらって、振動台が動いている時と動いていない時で砂の固さが違うことを体験してもらったことです。地盤の液状化による被害を写真などから知る機会は少ないと思いますが、液状化が起きるような砂地盤を実際揺らし、どのように変化するのかを体感できる良い機会になったのでは、と自負しています（次回はもう少し楽しみの要素を加えたいです）。午前10時から始まった一般公開は、Dr. ナダレンジャーと職員有志による『蛍の光』の演奏で、午後4時に幕を閉じました。

ご来場の方々には次回も再びお越しいただけるよう、また新たに多くの方々にご来場いただけるよう、次回は更にわかりやすい説明と楽しいデモンストレーションに努めたいと思えます。

(文責：主任研究員 田端 憲太郎)

